岩波文庫

1435

西方の人
續西方の人

他二篇

芥川龍之介著

岩波書店

名波

昭和十二年二月一日印刷
昭和十二年二月五日發行
昭和十二年十二月二十日第二刷發行

西方の人續西方の人他二篇 ★

定價二十錢

著者 芥川龍之介

發行者 東京市神田區一ツ橋二丁目三番地 岩波茂雄

印刷者 東京市神田區錦町三丁目十一番地 白井赫太郎

精興社印刷

岩波文庫
1435

發行所 東京市神田區一ツ橋二丁目三番地 岩波書店
電話九段一〇一八七・〇〇一八九・〇〇一八番
振替口座東京二六二四〇番（小賣部專用）

（坂本製本）

岩波文庫
1435

西方の人
續西方の人

他二篇

芥川龍之介著

岩波書店

目次

西方の人……五
續西方の人……五三
十本の針……八一
或舊友へ送る手記……九一

奇矯に対する偏愛は、世人の模倣者たることを欲せずして凡百なる凡人たらんとする論理的執着である。

けだしもっとも凡人は凡百なる凡人たるを見て、その卑屈珍奇の人たらんを過ぎる。[illegible]者はそれ出世間の厭倦をもって居り、また凡百出世主張しなければならぬ。

ある如き、奇矯といふ非難は、そもそも奇矯の早き日否なりと云ひしかしようとする虚偽を表はすのである。

[illegible]、奇矯もまた正面の対立するのは、通俗の高見を自己の味方とする日常平凡なものである。だが後者の場合なれば、安全確実だとはいへない。

カント　人生学　三

警句あるのは浅薄な物識りである。我は深遠な物識りの人なれば、やはりこれに対して沈黙を保ちたいと思うのである

仏一方れ

志賀は日常しやべっている言葉で、こんな美しい力強い文章を書いている。禁門のように精神の通った心理描写をしかも新鮮な感覚で綴られた気持のいい流れである

西方の人　　中島敦に印象的な作品

尚卿者、花房男流而不譲、吾為論而不歩者也。其言愚人之所驚、小人之所忌也。子思重則出之所謂愚人者也。尚卿物曰、孔夫子者、意亟剛也……意其為人也剛決而不遜、而自許太過。……尚卿待時一時之論不爾知其禍之至就此

蘇東坡　尚卿論

1　この人を見よ

わたしは彼是十年ばかり前に藝術的にクリスト教を――殊にカトリツク教を愛してゐた。長崎の「日本の聖母の寺」は未だに私の記憶に殘つてゐる。かう云ふわたしは北原白秋氏や木下杢太郎氏の播いた種をせつせと拾つてゐた鴉に過ぎない。それから又何年か前にはクリスト教の爲に殉じたクリスト教徒たちに或興味を感じてゐた。殉教者の心理はわたしにはあらゆる狂信者の心理のやうに病的な興味を與へたのである。わたしはやつとこの頃になつて四人の傳記作者のわたしたちに傳へたクリストと云ふ人を愛し出した。クリストは今日のわたしには行路の人のやうに見ることは出來ない。それは或は紅毛人たちは勿論、今日の青年た

ちには笑はれるであらう。しかし十九世紀の末に生まれたわたしは彼等のもう見るのに飽きた、――寧ろ倒すことをためらはない十字架に目を注ぎ出したのである。日本に生まれた「わたしのクリスト」は必しもガリラヤの湖を眺めてゐない。赤あかと實のつた柿の木の下に長崎の入江も見えてゐるのである。從つてわたしは歴史的事實や地理的事實を顧みないであらう。（それは少くともジアナリスティックには困難を避ける爲ではない。若し眞面目に構へようとすれば、五六冊のクリスト傳は容易にこの役をはたしてくれるのである。）それからクリストの一言一行を忠實に擧げてゐる餘裕もない。わたしは唯わたしの感じた通りに「わたしのクリスト」を記すのである。嚴しい日本のクリスト教徒も賣文の徒の書いたクリストだけは恐らくは大目に見てくれるであらう。

2　マリア

マリアは唯の女人だつた。が、或夜聖靈に感じて忽ちクリストを生み落した。我々はあらゆる女人の中に多少のマリアを感じるであらう。同時に又あらゆる男子の中にも——。いや、我々は爐に燃える火や畠の野菜や素燒きの瓶や巖壘に出來た腰かけの中にも多少のマリアを感じるであらう。マリアは「永遠に女性なるもの」ではない。唯「永遠に守らんとするもの」である。クリストの母、マリアの一生もやはり「涙の谷」の中に通つてゐた。が、マリアは忍耐を重ねてこの一生を歩いて行つた。世間智と愚と美德とは彼女の一生の中に一つに住んでゐる。ニイチエの叛逆はクリストに對するよりもマリアに對する叛逆だつた。

3 聖靈

我々は風や旗の中にも多少の聖靈を感じるであらう。聖靈は必ずしも「聖なるもの」ではない。唯「永遠に超えんとするもの」である。ゲエテはいつも聖靈にDaemonの名を與へてゐた。のみならずいつもこの聖靈に捉はれないやうに警戒してゐた。が、聖靈の子供たちは――あらゆるクリストたちは聖靈の爲にいつか捉はれる危險を持つてゐる。聖靈は惡魔や天使ではない。勿論、神とも異るものである。我々は時々善惡の彼岸に聖靈の歩いてゐるのを見るであらう。善惡の彼岸に、――しかしロムブロゾオは幸か不幸か精神病者の腦髓の上に聖靈の歩いてゐるのを發見してゐた。

4　ヨセフ

クリストの父、大工のヨセフは實はマリア自身だつた。彼のマリアほど尊まれないのはかう云ふ事實にもとづいてゐる。ヨセフはどう贔屓目に見ても、畢竟餘計ものの第一人だつた。

5　エリザベツ

マリアはエリザベツの友だちだつた。バプテズマのヨハネを生んだものはこのザカリアの妻（夫原）、エリザベツである。麥の中に芥子の花の咲いたのは畢に偶然と云ふ外はない。我々の一生を支配する力はやはりそこにも動いてゐるのである。

6 羊飼ひたち

マリアの聖靈に感じて孕んだことは羊飼ひたちを騷がせるほど、醜聞だつたことは確かである。クリストの母、美しいマリアはこの時から人間苦の途に上り出した。

7 博士たち

東の國の博士たちはクリストの星の現はれたのを見、黃金や乳香や沒藥を寶の盒に入れて捧げに行つた。が、彼等は博士たちの中でも僅かに二人か三人だつた。他の博士たちはクリストの星の現はれたことに氣づかなかつた。のみならず氣づ

いた博士たちの一人は高い臺の上に佇みながら、(彼は誰よりも年よりだつた。)きらきかにかかつた星を見上げ、はるかにクリストを憐んでゐた。

「又か!」

8 ヘロデ

ヘロデは或大きい機械だつた。かう云ふ機械は暴力により、多少の手數を省く爲にいつも我々には必要である。彼はクリストを恐れる爲にベツレヘムの幼な兒を皆殺しにした。勿論クリスト以外のクリストも彼等の中にはまじつてゐたであらう。ヘロデの兩手は彼等の血の爲にまつ赤になつてゐたかも知れない。我々は恐らくこの兩手の前に不快を感じずにはゐられないであらう。しかしそれは何世紀か前のギロテインに對する不快である。我々はヘロデを憎むことは勿論、輕蔑

することも出來るものではない。いや、寧ろ彼の爲に憐みを感じるばかりである。ヘロデはいつも玉座の上に憂鬱な顏をまともにしたまま、橄欖や無花果の中にあるベツレヘムの國を見おろしてゐる。一行の詩さへ殘したこともなしに。……

9　ボヘミア的精神

幼いクリストはエヂプトへ行つたり、更に又「ガリラヤのうちに避け、ナザレと云へる邑」に止まつたりしてゐる。我々はかう云ふ幼な兒を佐世保や横須賀に轉任する海軍將校の家庭にも見出すであらう。クリストのボヘミア的精神は彼自身の性格の前にかう云ふ境遇にも潜んでゐたかも知れない。

10 父

クリストはナザレに住んだ後、ヨセフの子供でないことを知つたであらう。或は聖靈の子供であることを、――しかしそれは前者よりも決して重大な事件ではない。「人の子」クリストはこの時から正に二度目の誕生をした。「女中の子」ストリントベリイはまづ彼の家族に反叛した。それは彼の不幸であり、同時に又彼の幸福だつた。クリストも恐らくは同じことだつたであらう。彼はかう云ふ孤獨の中に仕合せにも彼の前に生まれたクリスト――バプテズマのヨハネに遭遇した。我々は我々自身の中にもヨハネに會ふ前のクリストの心の陰影を感じてゐる。ヨハネは野蜜や蝗を食ひ、荒野の中に住まつてゐた。が、彼の住まつてゐた荒野は必しも日の光のないものではなかつた。少くともクリスト自身の中にあつた、

薄暗い荒野に比べて見れば……。

11　ヨハネ

西方の人

バプテズマのヨハネはロマン主義を理解出來ないクリストだつた。彼の威嚴は荒金のやうにそこにかがやかに殘つてゐる。彼のクリストに及ばなかつたのも恐らくはその事實に存するであらう。クリストに洗禮を授けたヨハネは槲の木のやうに逞しかつた。しかし獄中にはいつたヨハネはもう枝や葉に漲つてゐる槲の木の力を失つてゐた。彼の最後の慟哭はクリストの最後の慟哭のやうにいつも我々を動かすのである。——

「クリストはお前だつたか、わたしだつたか？」

ヨハネの最後の慟哭は——いや、必しも慟哭ばかりではない。太い槲の木は枯

れかかつたものの、未だに外見だけは枝を張つてゐる。若しこの氣力さへなかつたとしたならば、二十何歳かのクリストは決して冷かにかう言はなかつたであらう。

「わたしの現にしてゐることをヨハネに話して聞かせるが善い。」

12　惡魔

クリストは四十日の斷食をした後、目のあたりに惡魔と問答した。我々も惡魔と問答をする爲には何等かの斷食を必要としてゐる。我々の或ものはこの問答の中に惡魔の誘惑に負けるであらう。又或ものは誘惑に負けずに我々自身を守るであらう。しかし我々は一生を通じて惡魔と問答をしないこともあるのである。クリストは第一にパンを斥けた。が、「パンのみでは生きられない」と云ふ註釋を施

すのを忘れなかつた。それから彼自身の力を恃めと云ふ悪魔の理想主義者的忠告を斥けた。しかし又「主たる汝の神を試みてはならぬ」と云ふ辯證法を用意してゐた。最後に「世界の國々とその榮華と」を斥けた。それはパンを斥けたのと或は同じことのやうに見えるであらう。しかしパンを斥けたのは現實的欲望を斥けたのに過ぎない。クリストはこの第三の答の中に我々自身の中に絶えることのない、あらゆる地上の夢を斥けたのである。この論理以上の論理的決闘はクリストの勝利に違ひなかつた。ヤコブの天使と組み合つたのも恐らくはかう云ふ決闘だつたであらう。悪魔は畢に、クリストの前に頭を垂れるより外はなかつた。けれども彼のマリアと云ふ女人の子供であることは忘れなかつた。この悪魔との問答はいつか重大な意味を與へられてゐる。が、クリストの一生では必しも大事件と云ふことは出來ない。彼は彼の一生の中に何度も「サタンよ、退け」と言つた。現に彼の傳記作者の一人、――ルカはこの事件を記した後、「悪魔この試み皆畢りて

暫く彼を離れたり」とつけ加へてゐる。

13 最初の弟子たち

クリストは僅かに十二歳の時に彼の天才を示してゐる。が、洗禮を受けた後も誰も弟子になるものはなかつた。村から村を歩いてゐた彼は定めし寂しさを感じたであらう。けれどもとうとう四人の弟子たちは——しかも四人の漁師たちは彼の左右に從ふことになつた。彼等に對するクリストの愛は彼の一生を貫いてゐる。彼は彼等に圍まれながら、見る見る鋭い舌に富んだ古代のジャアナリストになつて行つた。

14 聖靈の子供

クリストは古代のジャアナリストになつた。同時に又古代のボヘミアンになつた。彼の天才は飛躍をつづけ、彼の生活は一時代の社會的約束を踏みにじつた。彼を理解しない弟子たちの中に時々ヒステリイを起しながら。——しかしそれは彼自身には大體歡喜に滿ち渡つてゐた。クリストは彼の詩の中にどの位情熱を感じてゐたであらう。「山上の教へ」は二十何歳かの彼の感激に滿ちた產物である。彼はどう云ふ前人も彼に若かないのを感じてゐた。この海のやうに高まつた彼の天才的ジャアナリズムは勿論敵を招いたであらう。が、彼等はクリストを恐れない訣には行かなかつた。それは實に彼等には——クリストよりも人生を知り、從つて又人生に對する恐怖を抱いてゐる彼等にはこの天才の量見(りやうけん)の呑みこめない爲

に外ならなかつた。

15 女人

大勢の女人たちはクリストを愛した。就中マグダラのマリアなどは、一度彼に會つた爲に七つの惡鬼に攻められるのを忘れ、彼女の職業を超越した詩的戀愛さへ感じ出した。クリストの命の終つた後、彼女のまつ先に彼を見たのはかう云ふ戀愛の力である。クリストも亦大勢の女人たちを、——就中マグダラのマリアを愛した。彼等の詩的戀愛は未だに燕花子のやうに匂やかである。クリストは度たび彼女を見ることに彼の寂しさを慰めたであらう。後代は、——或は後代の男子たちは彼等の詩的戀愛に冷淡だつた。(尤も藝術的主題以外には) しかし後代の女人たちはいつもこのマリアを嫉妬してゐた。

「なぜクリスト様は誰よりも先にお母さんのマリア様に再生をお示しにはならなかつたのかしら？」

それは彼女等の洩らして來た、最も僞善的な歎息だつた。

16　奇蹟

クリストは時々奇蹟を行つた。が、それは彼自身には一つの比喩を作るよりも容易だつた。彼はその爲にも奇蹟に對する嫌惡の情を抱いてゐた。その爲にも——クリストの使命を感じてゐたのは彼の道を敎へることだつた。彼の奇蹟を行ふことは後代にルツソオの吼り立つた通り、彼の道を敎へるのには不便を與へるのに違ひなかつた。しかし彼の「小羊たち」はいつも奇蹟を望んでゐた。クリストも亦三度に一度はこの願に從はずにはゐられなかつた。彼の人間的な、餘りに人

間的な性格はかう云ふ一面にも露はれてゐる。が、クリストは奇蹟を行ふ度に必ず責任を回避してゐた。

「お前の信仰はお前を癒した。」

しかしそれは同時に又科學的眞理にも違ひなかつた。クリストは又或時はやむを得ず奇蹟を行つた爲に、――或長病に苦しんだ女の彼の衣にさはつた爲に彼の力の脱けるのを感じた。彼の奇蹟を行ふことにいつも多少ためらつたのはかう云ふ實感にも明らかである。クリストは、後代のクリスト教徒は勿論、彼の十二人の弟子たちよりもはるかに鋭い理智主義者だつた。

17 背德者

クリストの母、美しいマリアはクリストには必しも母ではなかつた。彼の最も

愛したものは彼の道に從ふものだつた。クリストは又情熱に燃え立つたまま、大勢の人々の集つた前に大膽にもかう云ふ彼の氣もちを言ひ放すことさへ憚らなかつた。マリアは定めし戸の外に彼の言葉を聞きながら、悄然と立つてゐたことであらう。我々は我々自身の中にマリアの苦しみを感じてゐる。たとひ我々自身の中にクリストの情熱を感じてゐるとしても、——しかしクリスト自身も亦時々はマリアを憐んだであらう。かがやかしい天國の門を見ずにありのままのイエルサレムを眺めた時には。……

18 クリスト教

クリスト教はクリスト自身も實行することの出來なかつた、逆說の多い詩的宗教である。彼は彼の天才の爲に人生さへ笑つて投げ棄ててしまつた。ワイルドの

彼にロマン主義者の第一人を發見したのは當り前である。彼の敎へた所によれば、「ソロモンの榮華の極みの時にだにその裝ひ」は風に吹かれる一本の百合の花に若かなかつた。彼の道は唯詩的に——あすの日を思ひ煩はずに生活しろと云ふことに存してゐる。何の爲に？——それは勿論ユダヤ人たちの天國へはひる爲に違ひなかつた。しかしあらゆる天國も流轉せずにはゐることは出來ない。石鹼の匂のする薔薇の花に滿ちたクリスト敎の天國はいつか空中に消えてしまつた。が、我々はその代りに幾つかの天國を造り出してゐる。クリストは我々に天國に對する悄怳を呼び起した第一人だつた。更に又彼の逆說は後代に無數の神學者や神祕主義者を生じてゐる。彼等の議論はクリストを茫然とさせずには措かなかつたであらう。しかし彼等の或者はクリストよりも更にクリスト敎的である。クリストは兎に角我々に現世の向うにあるものを指し示した。我々はいつもクリストの中に我々の求めてゐるものを、——我々を無限の道へ驅りやる喇叭の聲を感じるで

あらう。同時に又いつもクリストの中に我々を虐んでやまないものを、――近代のやつと表現した世界苦を感じずにはゐられないであらう。

19　ジヤアナリスト

我々は唯我々自身に近いものの外は見ることは出來ない。少くとも我々に迫つて來るものは我々自身に近いものだけである。クリストはあらゆるジヤアナリストのやうにこの事實を直覺してゐた。花嫁、葡萄園、驢馬、工人――彼の教へは目のあたりにあるものを一度も利用せずにすましたことはない。「善いサマリア人」や「放蕩息子の歸宅」はかう云ふ彼の詩の傑作である。抽象的な言葉ばかり使つてゐる後代のクリスト教的ジヤアナリスト――牧師たちは一度もこのクリストのジヤアナリズムの效果を考へなかつたのであらう。彼は彼等に比べれば勿論、

後代のクリストたちに比べても、決して遜色のあるジヤアナリストではない。彼のジヤアナリズムはその爲に西方の古典と肩を並べてゐる。彼は實に古い炎に新しい薪を加へるジヤアナリストだつた。

20 エホバ

クリストの度たび說いたのは勿論天上の神である。「我々を造つたものは神ではない、神こそ我々の造つたものである。」——かう云ふ唯物主義者グウルモンの言葉は我々の心を喜ばせるであらう。それは我々の腰に垂れた鎖を截りはなす言葉である。が、同時に又我々の腰に新らしい鎖を加へる言葉である。のみならずこの新らしい鎖も古い鎖よりも强いかも知れない。神は大きい雲の中から細かい神經系統の中に下り出した。しかもあらゆる名のもとにやはりそこに位してゐ

る。クリストは勿論目のあたりに度たびこの神を見たであらう。（神に會はなかつたクリストの惡魔に會つたことは考へられない。）彼の神も亦あらゆる神のやうに社會的色彩の强いものである。しかし兎に角我々と共に生まれた「主なる神」だつたのに違ひない。クリストはこの神の爲に――詩的正義の爲に戰ひつづけた。あらゆる彼の逆說はそこに源を發してゐる。後代の神學はそれ等の逆說を最も詩の外に解釋しようとした。それから、――誰も讀んだことのない、退屈な無數の本を殘した。ヴオルテエエルは今日では滑稽なほど「神學」の神を殺す爲に彼の劍を揮つてゐる。しかし「主なる神」は死ななかつた。同時に又クリストも死ななかつた。神はコンクリイトの壁に苔の生える限り、いつも我々の上に臨んでゐるであらう。ダンテはフランチエスカを地獄に墮（おと）した。が、いつかこの女人を炎の中から救つてゐた。一度でも悔い改めたものは――美しい一瞬間を持つたものはいつも「限りなき命（いのち）」に入つてゐる。感傷主義の神と呼ばれ易いのも恐らくは

かう云ふ事實の爲であらう。

21 故郷

「豫言者は故郷に入れられず。」――それは或はクリストには第一の十字架だつたかも知れない。彼は畢には全ユダヤを故郷としなければならなかつた。汽車や自動車や汽船や飛行機は今日ではあらゆるクリストに世界中を故郷にしてゐる。勿論又あらゆるクリストは故郷に入れられなかつたのに違ひない。現にボオを入れたものはアメリカではないフランスだつた。

22 詩人

クリストは一本の百合の花を「ソロモンの榮華の極みの時」よりも更に美しいと感じてゐる。（尤も彼の弟子たちの中にも彼ほど百合の花の美しさに恍惚としたものはなかつたであらう。）しかし弟子たちと話し合ふ時には會話上の禮節を破つても、野蠻なことを言ふのを憚らなかつた。――「凡そ外より人に入るものの人を汚し能はざる事を知らざる乎。そは心に入らず、腹に入りて厠に遺す。すなはち食ふ所のもの潔れり。」……

23　ラザロ

クリストはラザロの死を聞いた時、今までにない涙を流した。今までにない――或は今まで見せずにゐた涙を。ラザロの死から生き返つたのはかう云ふ彼の感傷主義の爲である。母のマリアを顧みなかつた彼はなぜラザロの姉妹たち、――

マルタやマリアの前に涙を流したのであらう？　この矛盾を理解するものはクリストの、――或はあらゆるクリストの天才的利己主義を理解するものである。

24　カナの饗宴

クリストは女人を愛したものの、女人と交はることを顧みなかつた。それはモハメットの四人の女人たちと交ることを許したのと同じことである。彼等はいづれも一時代を、――或は社會を越えられなかつた。しかしそこには何ものよりも自由を愛する彼の心も動いてゐたことは確かである。後代の超人は犬たちの中に假面をかぶることを必要とした。しかしクリストは假面をかぶることも不自由のうちに數へてゐた。所謂「爐邊の幸福」の讃は勿論彼には明らかだつたであらう。アメリカのクリスト、――ホヰツトマンはやはりこの自由を選んだ一人である。

我々は彼の詩の中に度たびクリストを感ずるであらう。クリストは未だに大笑ひをしたまま、踊り子や花束や樂器に滿ちたカナの饗宴を見おろしてゐる。しかし勿論その代りにそこには彼の贖はなければならぬ多少の寂しさはあつたことであらう。

25 天に近い山上の問答

クリストは高い山の上に彼の前に生まれたクリストたち——モオゼやエリヤと話をした。それは惡魔と戰つたのよりも更に意味の深い出來事であらう。彼はその何日か前に彼の弟子たちにイエルサレムへ行き、十字架にかかることを豫言してゐた。彼のモオゼやエリヤと會つたのは彼の或精神的危機に佇んでゐた證據である。彼の顏は「日の如く輝き其衣は白く光」つたのも必しも二人のクリストた

ちの彼の前に下つた爲ばかりではない。彼は彼の一生の中でも最もこの時は嚴肅だつた。彼の傳記作者は彼等の間の問答を記錄に殘してゐない。しかし彼の投げつけた問は「我等は如何に生くべき乎」である。クリストの一生は短かつたであらう。が、彼はこの時に、――やつと三十歳に及んだ時に彼の一生の總決算をしなければならない苦しみを嘗めてゐた。モオゼはナポレオンも言つたやうに戰略に長じた將軍である。エリヤも亦クリストよりも政治的天才に富んでゐたであらう。のみならず今日は昨日ではない。今日ではもう紅海の波も壁のやうに立たなければ、炎の車も天上から來ないのである。クリストは彼等と問答しながら、愈彼の見苦しい死の近づいたのを感じずにはゐられなかつた。天に近い山の上には氷のやうに澄んだ日の光の中に岩むらの聳えてゐるだけである。しかし深い谷の底には柘榴や無花果も匂つてゐたであらう。そこには又家々の煙もかすかに立ち昇つてゐたかも知れない。クリストも亦恐らくはかう云ふ下界の人生に懷しさを

感じずにはゐなかつたであらう。しかし彼の道は嫌でも應でも人氣のない天に向つてゐる。彼の誕生を告げた星は――或は彼を生んだ聖靈は彼に平和を與へようとしない。「山を下る時イエス彼等（ペテロ、ヤコブ、その兄弟のヨハネ）に命じて人の子の死より甦るまでは汝等の見し事を人に告ぐべからずと言へり。」――天に近い山の上にクリストの彼に先立つた「大いなる死者たち」と話をしたのは實に彼の日記にだけそつと殘したいと思ふことだつた。

26　幼な兒の如く

クリストの敎へた逆說の一つは「我まことに汝等に告げん。若し改まりて幼な兒の如くならずば天國に入ることを得じ」である。この言葉は少しも感傷主義的ではない。クリストはこの言葉の中に彼自身の誰よりも幼な兒に近いことを現し

てゐる。同時に又聖靈の子供だつた彼自身の立ち場を明らかにしてゐる。ゲエテは彼の「タツソオ」の中にやはり聖靈の子供だつた彼自身の苦しみを歌ひ上げた。「幼な兒の如くあること」は幼稚園時代にかへることである。クリストの言葉に從へば、誰かの保護を受けなければ、人生に堪へないものの外は黄金の門に入ることは出來ない。そこには又世間智に對する彼の輕蔑も忍びこんでゐる。彼の弟子たちは正直に（幼な兒を前にしたクリストの圖の我々に不快を與へるのは後代の僞善的感傷主義の爲である。）彼の前に立つた幼な兒に驚かない訣には行かなかつたであらう。

27 イエルサレムへ

クリストは一代の豫言者になつた。同時に又彼自身の中の豫言者は、——或は

彼を生んだ聖靈はおのづから彼を飜弄し出した。我々は蠟燭の火に燒かれる蛾の中にも彼を感じるであらう。蛾は唯蛾の一匹に生まれた爲に蠟燭の火に燒かれるのである。クリストも亦蛾と變ることはない。ショウは十字架に懸けられる爲にイエルサレムへ行つたクリストに雷に似た冷笑を與へてゐる。しかしクリストはイエルサレムへ驢馬を驅つてはひる前に彼の十字架を背負つてゐた。それは彼にはどうすることも出來ない運命に近いものだつたであらう。彼はそこでも天才だつたと共にやはり畢に「人の子」だつた。のみならずこの事實は數世紀を重ねた「メシア」と云ふ言葉のクリストを支配してゐたことを敎へてゐる。樹の枝を敷いた道の上に「ホザナよ、ホザナよ」の聲に打たれながら、驢馬を走らせて行つたクリストは彼自身だつたと共にあらゆるイスラエルの豫言者たちだつた。彼の後に生まれたクリストの一人は遠いロオマの道の上に再生したクリストに「どこへ行く?」と詰られたことを傳へてゐる。クリストも亦イエルサレムへ行かなか

つたとすれば、やはり誰か豫言者たちの一人に「どこへ行く?」と詰られたことであらう。

28 イエルサレム

クリストはイエルサレムへはひつた後、彼の最後の戰ひをした。それは水々しさを缺いてゐたものの、何か烈しさに滿ちたものである。彼は道ばたの無花果を呪つた。しかもそれは無花果の彼の豫期を裏切つて一つも實をつけてゐない爲だつた。あらゆるものを慈(いつくし)んだ彼もここでは半ばヒステリツクに彼の破壞力を揮つてゐる。

「カイゼルのものはカイゼルに返せ。」

それはもう情熱に燃えた青年クリストの言葉ではない。彼に復讐し出した人生

に對する（彼は勿論人生よりも天國を重んじた詩人だつた。）老成人クリストの言葉である。そこに潜んでゐるものは必しも彼の世間智ばかりではない。彼はモオゼの昔以來、少しも變らない人間愚に愛想を盡かしてゐたことであらう。が、彼の苛立たしさは彼にエホバの「殿に入りてその中にをる賣買する者を殿より逐出し、兌銀者の案、鴿を賣者の椅子」を倒させてゐる。

「この殿も今に壞れてしまふぞ。」

或女人はかう云ふ彼の爲に彼の額へ香油を注いだりした。クリストは彼の弟子たちにこの女人を咎めないことを命じた。それから――十字架と向かひ合つたクリストの氣もちは彼を理解しない彼等に對する、優しい言葉の中に忍びこんでゐる。彼は香油を匂はせたまま、（それは土埃りにまみれ勝ちな彼には珍らしい出來事の一つに違ひなかつた。）靜かに彼等に話しかけた。

「この女人はわたしを葬る爲にわたしに香油を注いだのだ。わたしはいつもお前

たちと一しよにゐることの出來るものではない。」

ゲツセマネの橄欖はゴルゴタの十字架よりも悲壯である。クリストは死力を揮ひながら、そこに彼自身とも、――彼自身の中の聖靈とも戰はうとした。ゴルゴタの十字架は彼の上に次第に影を落さうとしてゐる。彼はこの事實を知り悉してゐた。が、彼の弟子たちは、――ペテロさへ彼の心もちを理解することは出來なかつた。クリストの祈りは今日(こんにち)でも我々に迫る力を持つてゐる。――

「わが父よ、若し出來るものならば、この杯をわたしからお離し下さい。けれども仕かたはないと仰有るならば、どうか御心のままになすつて下さい。」

あらゆるクリストは人氣(ひとけ)のない夜中に必ずかう祈つてゐる。同時に又あらゆるクリストの弟子たちは「いたく憂(うれへ)て死ぬばかり」な彼の心もちを理解せずに橄欖の下に眠つてゐる。……

29 ユダ

後代はいつかユダの上にも惡の圓光を輝かせてゐる。しかしユダは必しも十二人の弟子たちの中でも特に惡かつた訣ではない。ペテロさへ庭鳥の聲を擧げる前に三度クリストを知らないと言つてゐる。ユダのクリストを賣つたのはやはり今日の政治家たちの彼等の首領を賣るのと同じことだつたであらう。パピニも亦ユダのクリストを賣つたのを大きい謎に數へてゐる。が、クリストは明らかに誰にでも賣られる危機に立つてゐた。祭司の長たちはユダの外にも何人かのユダを數へてゐた筈である。唯ユダはこの道具になるいろいろの條件を具へてゐた。勿論それ等の條件の外に偶然も加はつてゐたことであらう。後代はクリストを「神の子」にした。それは又同時にユダ自身の中に惡魔を發見することになつたのであ

る。しかしユダはクリストを賣つた後、白楊の木に縊死してしまつた。彼のクリストの弟子だつたことは、――神の聲を聞いたものだつたことは或はそこにも見られるかも知れない。ユダは誰よりも彼自身を憎んだ。十字架に懸つたクリストも勿論彼を苦しませたであらう。しかし彼を利用した祭司の長たちの冷笑もやはり彼を憤らせたであらう。

「お前のしたいことをはたすが善い。」

かう云ふユダに對するクリストの言葉は輕蔑と憐憫とに溢れてゐる。「人の子」クリストは彼自身の中にも或はユダを感じてゐたかも知れない。しかしユダは不幸にもクリストのアイロニイを理解しなかつた。

30 ピラト

ピラトはクリストの一生には唯偶然に現れたものである。彼は畢に代名詞に過ぎない。後代も亦この官吏に傳說的色彩を與へてゐる。しかしアナトオル・フランスだけはかう云ふ色彩に欺かれなかつた。

31　クリストよりもバラバを

クリストよりもバラバを――それは今日でも同じことである。バラバは叛逆を企てたであらう。同時に又人々を殺したであらう。しかし彼等はおのづから彼の所業を理解してゐる。ニイチエは後代のバラバたちを街頭の犬に比へたりした。彼等は勿論バラバの所業に憎しみや怒りを感じてゐたであらう。が、クリストの所業には、――恐らくは何も感じなかつたであらう。若し何か感じてゐたとすれば、それは彼等の社會的に感じなければならぬと思つたものである。彼等の精神

的奴隷たちは、――肉體だけ逞しい兵卒たちはクリストに荊の冠をかむらせ、紫の袍をまとはせた上、「ユダヤの王安かれ」と叫んだりした。クリストの悲劇はかう云ふ喜劇のただ中にあるだけに見じめである。クリストは正に精神的にユダヤの王だつたのに違ひない。が、天才を信じない犬たちは――いや、天才を發見することは手易いと信じてゐる犬たちはユダヤの王の名のもとに眞のユダヤの王を嘲つてゐる。「方伯のいと奇しとするまでにイエス一言も答へせざりき。」――クリストは傳記作者の記した通り、彼等の訊問や嘲笑には何の答へもしなかつたであらう。のみならず何の答へをすることも出來なかつたことは確かである。しかしバラバは頭を擧げて何ごとも明らかに答へたであらう。バラバは唯彼の敵に叛逆してゐる。が、クリストは彼自身に、――彼自身の中のマリアに叛逆してゐる。それはバラバの叛逆よりも更に根本的な叛逆だつた。同時に又「人間的な、餘りに人間的な」叛逆だつた。

32 ゴルゴタ

十字架の上のクリストは畢に「人の子」に外ならなかつた。

「わが神、わが神、どうしてわたしをお捨てなさる？」

勿論英雄崇拜者たちは彼の言葉を冷笑するであらう。況や聖靈の子供たちでないものは唯彼の言葉の中に「自業自得」を見出すだけである。「エリ、エリ、ラマサバクタニ」は事實上クリストの悲鳴に過ぎない。しかしクリストはこの悲鳴の爲に一層我々に近づいたのである。のみならず彼の一生の悲劇を一層現實的に教へてくれたのである。

33　ピエタ

クリストの母、年をとつたマリアはクリストの死骸の前に歎いてゐる。――かう云ふ圖の Piéta と呼ばれるのは必しも感傷主義的と言ふことは出來ない。唯ピエタを描かうとする畫家たちはマリア一人だけを描かなければならぬ。

34　クリストの友だち

クリストは十二人の弟子たちを持つてゐた。が、一人も友だちは持たずにゐた。若し一人でも持つてゐたとすれば、それはアリマタヤのヨセフである。「日暮る
る時尊き議員なるアリマタヤのヨセフと云へる者來れり。この人は神の國を望め

るものなり。彼はばからずピラトに往きてイエスの屍を乞ひたり。」――マタイよりも古いと傳へられるマコは彼のクリストの傳記の中にかう云ふ意味の深い一節を殘した。この一節はクリストの弟子たちを「これに從ひつかへしものどもなり」と云ふ言葉と全然趣を異にしてゐる。ヨセフは恐らくはクリストよりも更に世間智に富んだクリストだつたであらう。彼は「はばからずピラトに往きイエスの屍を乞」つたことはクリストに對する彼の同情のどの位深かつたかを示してゐる。教養を積んだ議員のヨセフはこの時には率直そのものだつた。後代はピラトやユダよりもはるかに彼には冷淡である。しかし彼は十二人の弟子たちよりも或は彼を知つてゐたであらう。ヨハネの首を皿にのせたものは殘酷にも美しいサロメである。が、クリストは命を終つた後、彼を葬る人々のうちにアリマタヤのヨセフを數へてゐた。彼はそこにヨハネよりもまだしも幸福を見出してゐる。ヨセフも亦議員にならなかつたとしたらば、――それはあらゆる「若し……ならば」

のやうに畢竟間はないでも善いことかも知れない。けれども彼は無花果の下や象嵌をした杯の前に時々彼の友だちのクリストを想ひ出してゐたことであらう。

35 復活

ルナンはクリストの復活を見たのをマグダレナのマリアの想像力の爲にした。想像力の爲に、――しかし彼女の想像力に飛躍を與へたものはクリストである。彼女の子供を失つた母は度たび彼の復活を――彼の何かに生まれ變つたのを見てゐる。彼は或は大名になつたり、或は池の上の鴨になつたり、或は又蓮華になつたりした。けれどもクリストはマリアの外にも死後の彼自身を示してゐる。この事實はクリストを愛した人々のどの位多かつたかを現すものであらう。彼は三日の後に復活した。が、肉體を失つた彼の世界中を動かすには更に長い年月を必要

とした。その爲に最も力のあつたのはクリストの天才を全身に感じたジヤアナリストのパウロである。クリストを十字架にかけた彼等は何世紀かの流れ去るのにつれ、シエクスピイアの復活を認めるやうにクリストの復活を認め出した。が、死後のクリストも流轉を閲したことは確かである。あらゆるものを支配する流行はやはりクリストも支配して行つた。クララの愛したクリストはパスカルの尊んだクリストではない。が、クリストの復活した後、犬たちの彼を偶像とすることは、――その又クリストの名のもとに横暴を振ふことは變らなかつた。クリストの後に生れたクリストたちの彼の敵になつたのはこの爲である。しかし彼等も同じやうにダマスカスへ向ふ途の上に必ず彼等の敵の中に聖靈を見ずにはゐられなかつた。

「サウロよ、サウロよ、何の爲にわたしを苦しめるのか？　棘のある鞭を蹴ることは決して手易いものではない。」

我々は唯茫々とした人生の中に佇んでゐる。我々に平和を與へるものは眠りの外にある訣はない。あらゆる自然主義者は外科醫のやうに殘酷にこの事實を解剖してゐる。しかし聖靈の子供たちはいつもかう云ふ人生の上に何か美しいものを殘して行つた。何か「永遠に超えようとするもの」を。

36　クリストの一生

勿論クリストの一生はあらゆる天才の一生のやうに情熱に燃えた一生である。彼は母のマリアよりも父の聖靈の支配を受けてゐた。彼の十字架の上の悲劇は實にそこに存してゐる。彼の後に生まれたクリストたちの一人、――ゲエテは「徐ろに老いるよりもさつさと地獄へ行きたい」と願つたりした。が、徐ろに老いて行つた上、ストリントベリイの言つたやうに晩年には神秘主義者になつたりした。

聖靈はこの詩人の中にマリアと吊り合ひを取つて住まつてゐる。彼の「大いなる異教徒」の名は必しも當つてゐないことはない。彼は實に人生の上にはクリストよりも更に大きかつた。況や他のクリストたちよりも大きかつたことは勿論である。彼の誕生を知らせる星はクリストの誕生を知らせる星よりも圓まるとかがやいてゐたことであらう。しかし我々のゲエテを愛するのはマリアの子供だつた爲ではない。マリアの子供たちは麥畠の中や長椅子の上にも充ち滿ちてゐる。いや、兵營や工場や監獄の中にも多いことであらう。我々のゲエテを愛するのは唯聖靈の子供だつた爲である。我々は我々の一生の中にいつかクリストと一しよにゐるであらう。ゲエテも亦彼の詩の中に度たびクリストの髭を拔いてゐる。クリストの一生は見じめだつた。が、彼の後に生まれた聖靈の子供たちの一生を象徴してゐた。（ゲエテさへも實はこの例に洩れない。）クリスト教は或は滅びるであらう。少くとも絶えず變化してゐる。けれどもクリストの一生はいつも我々を動か

すであらう。それは天上から地上へ登る爲に無殘にも折れた梯子である。薄暗い空から叩きつける土砂降りの雨の中に傾いたまゝ。……

37 東方の人

ニイチエは宗教を「衞生學」と呼んだ。それは宗教ばかりではない。道德や經濟も「衞生學」である。それ等は我々におのづから死ぬまで健康を保たせるであらう。「東方の人」はこの「衞生學」を大抵涅槃の上に立てようとした。老子は時々無何有の鄕に佛陀と挨拶をかはせてゐる。しかし我々は皮膚の色のやうにはつきりと東西を分つてゐない。クリストの、——或はクリストたちの一生の我々を動かすのはこの爲である。「古來英雄の士、悉く山阿に歸す」の歌はいつも我我に傳はりつづけた。が、「天國は近づけり」の聲もやはり我々を立たせずにはゐ

ない。老子はそこに年少の孔子と、――或は支那のクリストと問答してゐる。野蠻な人生はクリストたちをいつも多少は苦しませるであらう。太平の卿木となることを願つた「東方の人」たちもこの例に洩れない。クリストは「狐は穴あり。空の鳥は巣あり。然れども人の子は枕する所なし」と言つた。彼の言葉は恐らくは彼自身も意識しなかつた、恐しい事實を孕んでゐる。我々は狐や鳥になる外は容易に塒の見つかるものではない。

（昭和二年七月十日）

續西方の人

1　再びこの人を見よ

クリストは「萬人の鏡」である。「萬人の鏡」と云ふ意味は萬人のクリストに倣へと云ふのではない。たつた一人のクリストの中に萬人の彼等自身を發見するからである。わたしはわたしのクリストを描き、雜誌の締め切日の迫つた爲にペンを抛たなければならなかつた。今は多少の閑のある爲にもう一度わたしのクリストを描き加へたいと思つてゐる。誰もわたしの書いたものなどに、――殊にクリストを描いたものなどに興味を感ずるものはないでせうら。しかしわたしは四福音書の中にまざまざとわたしに呼びかけてゐるクリストの姿を感じてゐる。わたしのクリストを描き加へるのもわたし自身にはやめることは出來ない。

2 彼の傳記作者

ヨハネはクリストの傳記作者中、最も彼自身に媚びてゐるものである。野蠻な美しさにかがやいたマタイやマコに比べれば、――いや、巧みにクリストの一生を話してくれるルカに比べてさへ、近代に生まれた我々には人工の甘露味を味はさずには措かない。しかしヨハネもクリストの一生の意味の多い事實を傳へてゐる。我々は、ヨハネのクリストの傳記に或苛立たしさを感じるであらう。けれども三人の傳記作者たちに或魅力も感じられるであらう。人生に失敗したクリストは獨特の色彩を加へない限り、容易に「神の子」となることは出來ない。ヨハネはこの色彩を加へるのに少くとも最も當代には up to date の手段をとつてゐる。ヨハネの傳へたクリストはマコやマタイの傳へたクリストのやうに天才的飛

躍を具へてゐない。が、壯嚴にも優しいことは確かである。クリストの一生を傳へるのに何よりも簡古を重んじたマコは恐らく彼の傳記作者中、最もクリストを知つてゐたであらう。マコの傳へたクリストは現實主義的に生き生きしてゐる。我々はそこにクリストと握手し、クリストを抱き、――更に多少の誇張さへすれば、クリストの髯の匂を感じるであらう。しかし壯嚴にも劬りの深いヨハネのクリストも斥けることは出來ない。兎に角彼等の傳へたクリストに比べれば、後代の傳へたクリストは、――殊に彼をデカダンとした或ロシア人のクリストは徒らに彼を傷けるだけである。クリストは一時代の社會的約束を蹂躙することを顧みなかつた。（賣笑婦や稅吏や癲癇人はいつも彼の話し相手である。）しかし天國を見なかつたのではない。クリストを l'enfant に描いた畫家たちはおのづからかう云ふクリストに憐みに近いものを感じてゐたであらう。（それは母胎を離れた後、「唯我獨尊」の獅子吼をした佛陀よりもはるかに手よりのないものである。）

けれども幼兒だつたクリストに對する彼等の憐みは多少にもしろ、デカダンだつたクリストに對する彼の同情よりも勝つてゐる。クリストは如何に葡萄酒に醉つても、何か彼自身の中にあるものは天國を見せずには措かなかつた。彼の悲劇はその爲に、――單にその爲に起つてゐる。或ロシア人は或時のクリストの如何に神に近かつたを知つてゐない。が、四人の傳記作者たちはいづれもこの事實に注目してゐた。

3　共產主義者

クリストはあらゆるクリストたちのやうに共產主義的精神を持つてゐる。若し共產主義者の目から見るとすれば、クリストの言葉は悉く共產主義的宣言に變るであらう。彼に先立つたヨハネさへ「二つの衣服を持てる者は持たぬ者に分け與

へよ」と叫んでゐる。しかしクリストは無政府主義者ではない。我々人間は彼の前におのづから本體を露してゐる。（尤も彼は我々人間を操縱することは出來なかつた、――或は我々人間に操縱されることは出來なかつた。それは彼のヨセフではない、聖靈の子供だつた所以である。）しかしクリストの中にあつた共產主義者を論ずることはスキツルに遠い日本では少くとも不便を伴つてゐる。少くともクリスト教徒たちの爲に。

4　無抵抗主義者

クリストは又無抵抗主義者だつた。それは彼の同志さへ信用しなかつた爲である。近代では丁度トルストイの他人の眞實を疑つたやうに。――しかしクリストの無抵抗主義は何か更に柔かである。靜かに眠つてゐる雪のやうに冷かではあつ

ても柔かである。……

5 生活者

クリストは最速度の生活者である。佛陀は成道する爲に何年かを雪山の中に暮らした。しかしクリストは洗禮を受けると、四十日の斷食の後、忽ち古代のジヤアナリストになつた。彼はみづから燃え盡きようとする一本の蠟燭にそつくりである。彼の所業やジヤアナリズムは卽ちこの蠟燭の蠟淚だつた。

6 ジヤアナリズム至上主義者

クリストの最も愛したのは目ざましい彼のジヤアナリズムである。若し他のも

のを愛したとすれば、彼は大きい無花果のかげに年とつた豫言者になつてゐたであらう。平和はその時にはクリストの上にも下つて來たのに相違ない。彼はもうその時には丁度古代の賢人のやうにあらゆる妥協のもとに微笑してゐたであらう。しかし運命は幸か不幸か彼にかう云ふ安らかな晩年を與へてくれなかつた。それは受難の名を與へられてゐても、正に彼の悲劇だつたであらう。けれどもクリストはこの悲劇の爲に永久に若々しい顏をしてゐるのである。

7　クリストの財布

かう云ふクリストの收入は恐らくはジヤアナリズムによつてゐたのであらう。が、彼は「明日のことを考へるな」と云ふほどのボヘミアンだつた。ボヘミアン？　――我々はここにもクリストの中の共產主義者を見ることは困難ではない。

しかし彼は兎も角も彼の天才の飛躍するまま、明日のことを顧みなかつた。「ヨブ記」を書いたジヤアナリストは或は彼よりも雄大だつたかも知れない。しかし彼は「ヨブ記」にない優しさを忍びこます手腕を持つてゐた。この手腕は少からず彼の收入を扶けたことであらう。彼のジヤアナリズムは十字架にかかる前に正に最高の市價を占めてゐた。しかし彼の死後に比べれば、――現にアメリカ聖書會社は神聖にも年々に利益を占めてゐる。……

8　或時のマリア

クリストはもう十二歳の時に彼の天才を示してゐた。彼の傳記作者の一人、――ルカの語る所によれば、「其子イエルサレムに留りぬ。然るにヨセフと母これを知らず、三日の後殿にて遇ふ。彼教師の中に坐し、聽き且問ひゐたり。聞者皆其

知慧と其應對とを奇しとせり。」それは論理學を學ばずに論理に長じた學生時代のスウイフトと同じことである。かう云ふ早熟の天才の例は勿論世界中に稀ではない。クリストの父母は彼を見つけ、「さんざんお前を探してゐた」と言つた。すると彼は存外平氣に「どうしてわたしを尋ねるのです。わたしはわたしのお父さんのことを務めなければなりません」と答へた。「されど兩親は其語れる事を曉らず」と云ふのも恐らくは事實に近かつたであらう。けれども我々を動かすのは「其母これらの凡の事を心に藏めぬ」と云ふ一節である。美しいマリアはクリストの聖靈の子供であることを承知してゐた。この時のマリアの心もちはいぢらしいと共に哀れである。マリアはクリストの言葉の爲にヨセフに恥ぢなければならなかつたであらう。それから彼女自身の過去も考へなければならなかつたであらう。最後に――或は人氣のない夜中に突然彼女を驚かした聖靈の姿も思ひ出したかも知れない。「人の皆無、仕事は全部」と云ふフロオベルの氣もちは幼いクリ

ストの中にも漲つてゐる。しかし大工の妻だつたマリアはこの時も薄暗い「涙の谷」に向かひ合はなければならなかつたであらう。

9　クリストの確信

クリストは彼のジヤアナリズムのいつか大勢の讀者の爲に持て囃されることを確信してゐた。彼のジヤアナリズムに威力のあつたのはかう云ふ確信のあつた爲である。從つて彼は又最後の審判の、——卽ち彼のジヤアナリズムの勝ち誇ることも確信してゐた。尤もかう云ふ確信も時々は動かずにゐなかつたであらう。しかし大體はこの確信のもとに自由に彼のジヤアナリズムを公けにした。「一人の外に善者はなし、卽ち神なり」——それは彼の心の中を正直に語つたものだつたであらう。しかしクリストは彼自身も「善き者」でないことを知りながら、詩的

正義の爲に戰ひつづけた。この確信は事實となつたものの、勿論彼の虚榮心である。クリストも亦あらゆるクリストたちのやうにいつも未來を夢みてゐた超阿呆の一人だつた。若し超人と云ふ言葉に對して超阿呆と云ふ言葉を造るとすれば。

……

10　ヨハネの言葉

「世の罪を負ふ神の仔羊を觀よ。我に後れ來らん者は我よりも優れる者なり。」

――バプテズマのヨハネはクリストを見、彼のまはりにゐた人々にかう話したと傳へられてゐる。壁の上にストリントベリイの肖像を掲げ、「ここにわたしよりも優れたものがゐる」と言つた、逞しいイブセンの心もちはヨハネの心もちに近かつたであらう。そこに茨に近い嫉妬よりも寧ろ薔薇の花に似た理解の美しさを感

じるばかりである。かう云ふ年少のクリストのどの位天才的だつたは言はずとも善い。しかしヨハネもこの時にはやはり最も天才的だつたであらう。丁度丈の高いヨルダンの蘆のゆらかに星を撫でてゐるやうに。……

11 或時のクリスト

クリストは十字架にかかる前に彼の弟子たちの足を洗つてやつた。「ソロモンよりも大いなるもの」を以てみづから任じてゐたクリストのかう云ふ謙遜を示したのは我々を動かさずには措かないのである。それは彼の弟子たちに教訓を與へる爲ではない。彼も彼等と變らない「人の子」だつたことを感じた爲におのづからかう云ふ所業をしたのであらう。それはヨハネのクリストを見て「神の仔羊を觀よ」と言つたのよりも壯嚴である。平和に至る道は何びともクリストよりもマ

リアに學ばなければならぬ。マリアは唯この現世を忍耐して歩いて行つた女人である。（カトリツク教はクリストに達する爲にマリアを通じるのを常としてゐる。それは必しも偶然ではない。直ちにクリストに達しようとするのは人生ではいつも危險である。）或はクリストの母だつたと云ふ以外に所謂ニウス・ヴアリユウのない女人である。弟子たちの足さへ洗つてやつたクリストは勿論マリアの足もとにひれ伏したかつたことであらう。しかし彼の弟子たちはこの時も彼を理解しなかつた。

「お前たちはもう綺麗になつた。」

それは彼の謙遜の中に死後に勝ち誇る彼の希望（或は彼の虚榮心）の一つに溶け合つた言葉である。クリストは事實上逆説的にも正にこの瞬間には彼等に劣つてゐると同時に彼等に百倍するほどまさつてゐた。

12 最大の矛盾

クリストの一生の最大の矛盾は彼の我々人間を理解してゐたにも關らず、彼自身を理解出來なかつたことである。彼は庭鳥(にはとり)の啼く前にペテロさへ三度クリストを知らないと云ふことを承知してゐた。彼の言葉はその外にも如何に我々人間の弱いかと云ふことを教へてゐる。しかも彼は彼自身もやはり弱いことを忘れてゐた。クリストの一生を背景にしたクリスト教を理解することはこの爲に一々彼の所業を「豫言者X・Y・Zの言葉に應(かな)はせん爲なり」と云ふ詭辯を用ひなければならなかつた。のみならず畢にかう云ふ詭辯の古い貨幣になつた後はあらゆる哲學や自然科學の力を借りなければならなかつた。クリスト教は畢竟クリストの作つた教訓主義的な文藝に過ぎない。若し彼の（クリストの）ロマン主義的な色彩

を除けば、トルストイの晩年の作品はこの古代の教訓主義的な作品に最も近い文藝であらう。

13 クリストの言葉

クリストは彼の弟子たちに「わたしは誰か？」と問ひかけてゐる。この問に答へることは困難ではない。彼はジヤアナリストであると共にジヤアナリズムの中の人物、——或は「譬喩」と呼ばれてゐる短篇小説の作者だつたと共に「新約全書」と呼ばれてゐる小説的傳記の主人公だつたのである。我々は大勢のクリストたちの中にもかう云ふ事實を發見するであらう。クリストも彼の一生を彼の作品の索引につけずにはゐられない一人だつた。

14 孤身

「イエス……家に入りて人に知られざらん事を願ひしが隠れ得ざりき。」――かう云ふマコの言葉は又他の傳記作者の言葉である。クリストは度たび隠れようとした。が、彼のジヤアナリズムや奇蹟は彼に人々を集まらせてゐた。彼のイエルサレムへ赴いたのもペテロの彼を「メシア」と呼んだ影響も全然ないことはない。しかしクリストは十二の弟子たちよりも或は橄欖の林だの岩の山などを愛したであらう。しかもジヤアナリズムや奇蹟を行つたのは彼の性格の力である。彼はここでも我々のやうに矛盾せずにはゐられなかつた。けれどもジヤアナリストとなつた後、彼の孤身(こーん)を愛したのは疑ひのない事實である。トルストイは彼の死ぬ時に「世界中に苦しんでゐる人々は澤山ある。それをなぜわたしばかり大騒ぎ

をするのか？」と言つた。この名聲の高まると共に自ら安んじない心もちは我々にも決してない訣ではない。クリストは名高いジヤアナリストになつた。しかし時々大工の子だつた昔を懷がつてゐたかも知れない。ゲエテはかう云ふ心もちをフアウスト自身に語らせてゐる。フアウストの第二部の第一幕は實にこの吐息の作つたものと言つても善い。が、フアウストは幸ひにも艸花（さはな）の咲いた山の上に佇んでゐた。……

15　クリストの歎聲

クリストは比喩を話した後、「どうしてお前たちはわからないか？」と言つた。この歎聲も亦度たび繰り返されてゐる。それは彼ほど我々人間を知り、彼ほどボヘミア的生活をつづけたものには或は滑稽に見えるであらう。しかし彼はヒステ

リツクに時々かう叫ばずにはゐられなかつた。阿呆たちは彼を殺した後、世界中に大きい寺院を建ててゐる。が、我々はそれ等の寺院にやはり彼の歎聲を感ずるであらう。「どうしてお前たちはわからないか？」――それはクリストひとりの歎聲ではない。後代にも見じめに死んで行つた、あらゆるクリストたちの歎聲である。

16　サドカイの徒やパリサイの徒

サドカイの徒やパリサイの徒はクリストよりも事實上不滅である。この事實を指摘したのは「進化論」の著者ダアウインだつた。彼等は今後も地衣類のやうにいつまでも地上に生存するであらう。「適者生存」は彼等には正に當嵌まる言葉である。彼等ほど地上の適者はない。彼等は何の感激もなしに油斷のない處世術

を講じてゐる。マリアは恐らくクリストの彼等の一人でなかつたことを悲しんだであらう。ゲエテをベエトホオヴエンの罵つたのは正にゲエテ自身の中にゐるサドカイの徒やパリサイの徒を罵つたのだつた。

17 カヤパ

祭司の長だつたカヤパにも後代の憎しみは集つてゐる。彼はクリストを憎んでゐたであらう。が、必しもこの憎しみは彼一人にあつた訣ではない。唯彼を推し立てることのクリストを憎み或は妬んだ大勢の人々に便利だつたからである。カヤパはきららに袍を着下し、冷かにクリストを眺めてゐたであらう。現世はそこにピラトと共に意氣地のない聖靈の子供を嘲つてゐる。燃えさかる松明の光りの中に。……

18　二人の盜人たち

クリストの死の不評判だつたことは彼の十字架にかかる時にも盜人たちと一しよだつたのに明からである。盜人たちの一人はクリストを罵ることを憚らなかつた。彼の言葉は彼自身の中にやはり人生の爲に打ち倒されたクリストを見出したことを示してゐる。しかしもう一人の盜人は彼よりも更に妄想を持つてゐた。クリストはこの盜人の言葉に彼の心を動かしたであらう。この盜人を慰めた彼の言葉は同時に又彼自身を慰めてゐる。

「お前はお前の信仰の爲に必ず天國にはひるであらう。」

後代はこの盜人に彼等の同情を示してゐる。が、もう一人の盜人には、――クリストを罵つた盜人には輕蔑を示してゐるのに過ぎない。それは正にクリストの

教へた詩的正義の勝利を示すものであらう。が、彼等は、――サドカイの徒やパリサイの徒は今日でも私かにこの盗人に贊成してゐる。事實上天國にはひることは彼等には無花果や眞桑瓜の汁を啜るほど重大ではない。

19 兵卒たち

兵卒たちは十字架の下にクリストの衣を分ち合つた。彼等には彼の衣の外に彼の持つてゐたものは見えなかつたのである。彼等は定めし肩幅の廣い模範的兵卒たちだつたのに違ひない。クリストは定めし彼等を見おろし、彼等の所業を輕蔑したであらう。しかし又同時に是認したであらう。クリストはクリスト自身の外には我々人間を理解してゐる。彼の教へた言葉によれば、感傷主義的詠嘆は最もクリストの嫌つたものだつた。

20 受難

十字架にかかつたクリストは多少の虚榮心を持つてゐたものの、彼の肉體的苦痛と共に精神的苦痛にも襲はれたであらう。殊に十字架を見守つてゐたマリアを眺めることは苦しかつた訣である。が、彼は「エリ、エリ、ラマサバクタニ」と云ふ必死の聲を擧げた後も（たとひそれは彼の愛する讃美歌の一節だつたにもせよ）彼の息の絶える前には何かおほ聲を發してゐた。我々はこのおほ聲の中に或は唯死に迫つた力を感ずるばかりであらう。しかしマタイの言葉によれば、「殿の幔上より下まで裂けて二つになり、又地震ひて岩裂け、墓ひらけて既に寢ねたる聖徒の身多く甦へつた。彼の死は確かに大勢の人々にかう云ふショックを與へたであらう。（マリアの腦貧血を起したことを記してゐないのは新約聖書の威嚴を

尊んだからである。）クリストの一言一行に永遠の註釋を與へてゐるパピニさへこの事實はマタイを引いてゐるのに過ぎない。彼自身を欺いてゐるパピニの詩的情熱はそこにも亦馬脚を露してゐる。クリストの死は事實上彼の豫言者的天才を妄信した人々には――彼自身の中にエリヤを見た人々には餘りに我々に近いものだつた。從つて又炎の車に乘つて天上に去るよりも恐しかつた。彼等は唯その爲にショツクを受けずにはゐなかつたのである。しかし年をとつた祭司たちはこのショツクに欺かれはしなかつたであらう。

「それ見たことか！」

彼等の言葉はイエルサレムからニウヨウクや東京へも傳はつてゐる。イエルサレムを圍んだ橄欖の山々を最も散文的に飛び超えながら。

21　文化的なクリスト

クリストの弟子たちに理解されなかつたのは彼の餘りに文化人だつた爲である。（彼の天才を別にしても。）彼等は大體は少くとも彼に奇蹟を求めてゐた。哲學の盛んだつた摩伽陀國の王子はクリストよりも奇蹟を行はなかつた。それはクリストの罪よりも寧ろユダヤの罪である。彼はロオマの詩人たちにも遜らない第一流のジヤアナリストだつた。同時に又彼の愛國的精神さへ抛つて顧みない文化人だつた。（マコはクリスト傳第七章二五以下にこの事實を記してゐる。）バプテズマのヨハネは彼の前には駱駝の毛衣や蝗や野蜜に野人の面目を露してゐる。クリストはヨハネの言つたやうに洗禮に唯聖靈を用ひてゐた。のみならず彼の洗禮（？）を受けたのは十二人の弟子たちの外にも賣笑婦や稅吏や罪人だつた。我

我はかう云ふ事實にもおのづから彼に柔い心臟のあつたのを見出すであらう。彼は又彼の行つた奇蹟の中に度たび細かい神經を示してゐる。文化的なクリストは十字架の上に最も野蠻な死を遂げるやうになつた。しかし野蠻なバプテズマのヨハネは文化的なサロメの爲に盆の上に頭をのせられてゐる。運命はここにも彼等の爲に逆說的な惡戲を忘れなかつた。……

22 貧しい人たちに

クリストのジヤアナリズムは貧しい人たちや奴隷を慰めることになつた。それは勿論天國などに行かうと思はない貴族や金持ちに都合の善かつた爲もあるであらう。しかし彼の天才は彼等を動かさずにはゐなかつたのである。いや、彼等ばかりではない。我々も彼のジヤアナリズムの中に何か美しいものを見出してゐる。

何度叩いても開かれない門のあることは我々も亦知らないわけではない。狹い門からはひることもやはり我々には必しも幸福ではないことを示してゐる。しかし彼のジヤアナリズムはいつも無花果のやうに甘みを持つてゐる。彼は實にイスラエルの民の生んだ、古今に珍らしいジヤアナリストだつた。同時に又我々人間の生んだ、古今に珍らしい天才だつた。「豫言者」は彼以後には流行してゐない。しかし彼の一生はいつも我々を動かすであらう。彼は十字架にかかる爲に、――ジヤアナリズム至上主義を推し立てる爲にあらゆるものを犧牲にした。ゲエテは婉曲にクリストに對する彼の輕蔑を示してゐる。丁度後代のクリストたちの多少はゲエテを嫉妬してゐるやうに。――我々はエマヲの旅びとたちのやうに我々の心を燃え上らせるクリストを求めずにはゐられないのであらう。

（昭和二年七月）

〔遺稿〕

十本の針

一　或人々

わたしはこの世の中に或人々のあることを知つてゐる。それ等の人々は何ごとも直覺すると共に解剖してしまふ。つまり一本の薔薇の花はそれ等の人々には美しいと共に畢竟植物學の教科書中の薔薇科の植物に見えるのである。現にその薔薇の花を折つてゐる時でも。……

唯直覺する人々はそれ等の人々よりも幸福である。眞面目と呼ばれる美德の一つはそれ等の人々（直覺すると共に解剖する）には與へられない。それ等の人々はそれ等の人々の一生を恐しい遊戯の中に用ひ盡すのである。あらゆる幸福はそれ等の人々には解剖する爲に減少し、同時に又あらゆる苦痛も解剖する爲に增加

するであらう。「生まれざりしならば」と云ふ言葉は正にそれ等の人々に當つてゐる。

二　わたしたち

わたしたちは必しもわたしたちではない。わたしたちの祖先は悉くわたしたちの中に息づいてゐる。わたしたちの中にゐるわたしたちの祖先に從はなければ、わたしたちは不幸に陷らなければならぬ。「過去の業」と云ふ言葉はかう云ふ不幸を比喩的に説明する爲に用ひられたのであらう。「わたしたち自身を發見する」のは卽ちわたしたちの中にゐるわたしたちの祖先を發見することである。同時に又わたしたちを支配する天上の神々を發見することである。

三　鴉と孔雀と

わたしたちに最も恐しい事實はわたしたちの畢にわたしたちを超えられないと云ふことである。あらゆる樂天主義的な目隱しをとつてしまへば、鴉はいつになつても孔雀になることは出來ない。或詩人の書いた一行の詩はいつも彼の詩の全部である。

四　空中の花束

科學はあらゆるものを說明してゐる。未來も亦あらゆるものを說明するであらう。しかしわたしたちの重んずるのは唯科學そのものであり、或は藝術そのもの

である。――卽ちわたしたちの精神的飛躍の空中に捉へた花束ばかりである。Ce homme est rien と言はないにもせよ、わたしたちは「人として」は格別大差のあるものではない。「人として」のボオドレエルはあらゆる精神病院に充ち滿ちてゐる。唯「惡の華」や「小さい散文詩」は一度も彼等の手に成つたことはない。

五　2＋2＝4

2＋2＝4 と云ふことは眞實である。しかし事實上＋（プラス）の間に無數の因子のあることを認めなければならぬ。卽ちあらゆる問題はこの＋の中に含まれてゐる。

六　天國

若し天國を造り得るとすれば、それは唯地上にだけである。この天國は勿論茨の中に薔薇の花の咲いた天國であらう。そこには又「あきらめ」と稱する絶望に安んじた人々の外には犬ばかり澤山歩いてゐる。尤も犬になることも惡いことではない。

七　懺悔

わたしたちはあらゆる懺悔にわたしたちの心を動かすであらう。が、あらゆる懺悔の形式は「わたしのしたことをしないやうに。わたしの言ふことをするやうに」である。

八　又或人びと

わたしは又或人々を知つてゐる。それ等の人々は何ごとにも容易に飽くことを知らない。一人の女人や一つの想念や一本の石竹や一きれのパンをいやが上にも得ようとしてゐる。從つてそれ等の人びとほど贅澤に暮らしてゐるものはない。同時に又それ等の人びとほど見じめに暮らしてゐるものはない。それ等の人々はいつの間にかいろいろのものの奴隷になつてゐる。從つて他人には天國を與へても、——或は天國に至る途を與へても、天國は畢にそれ等の人々自身のものになることは出來ない。「多欲喪身」と云ふ言葉はそれ等の人々に與へられるであらう。孔雀の羽根の扇や人乳を飲んだ豚の仔の料理さへそれ等の人びとにはそれだけでは決して滿足を與へないのである。それ等の人々は必然に悲しみや苦しみさ

へ求めずにはゐない。（求めずとも與へられる當然の悲しみや苦しみの外にも）そこにそれ等の人々を他の人々から截り離す一すぢの溝は掘られてゐる。それ等の人々は阿呆ではない。が、阿呆以上の阿呆である。それ等の人々を救ふものは唯それ等の人々以外の人々に變ることであらう。從つて到底救はれる道はない。

九　聲

大勢の人々の叫んでゐる中に一人（ひとり）の話してゐる聲は決して聞えないと思はれるであらう。が、事實上必ず聞えるのである。わたしたちの心の中に一すぢの炎（ほのお）の殘つてゐる限りは。――尤も時々彼の聲は後代のマイクロフオンを待つかも知れない。

十　言葉

わたしたちはわたしたちの氣もちを容易に他人に傳へることは出來ない。それは唯傳へられる他人次第によるのである。「拈華微笑」の昔は勿論、百數十行に亙る新聞記事さへ他人の氣もちと應じない時には到底合點の出來るものではない。「彼」の言葉を理解するものはいつも「第二の彼」であらう。しかしその「彼」も亦必ず植物のやうに生長してゐる。從つて或時代の「彼」の言葉は第二の或時代の「彼」以外に理解することは出來ないであらう。いや、或時代の彼自身さへ他の時代の彼自身には他人のやうに見えるかも知れない。が、幸ひにも「第二の彼」は「彼」の言葉を理解したと信じてゐる。

（昭和二年七月）

〔遺稿〕

或舊友へ送る手記

誰もまだ自殺者自身の心理をありのままに書いたものはない。それは自殺者の自尊心や或は彼自身に對する心理的興味の不足によるものであらう。僕は君に送る最後の手紙の中にはつきりこの心理を傳へたいと思つてゐる。尤も僕の自殺する動機は特に君に傳へずとも善い。レニエは彼の短篇の中に或自殺者を描いてゐる。この短篇の主人公は何の爲に自殺するかを彼自身も知つてゐない。君は新聞の三面記事などに生活難とか、病苦とか、或は又精神的苦痛とか、いろいろの自殺の動機を發見するであらう。しかし僕の經驗によれば、それは動機の全部ではない。のみならず大抵は動機に至る道程を示してゐるだけである。自殺者は大抵レニエの描いたやうに何の爲に自殺するかを知らないであらう。それは我々の行

爲するやうに複雜な動機を含んでゐる。が、少くとも僕の場合は唯ぼんやりした不安である。何か僕の將來に對する唯ぼんやりした不安である。君は或は僕の言葉を信用することは出來ないであらう。しかし十年間の僕の經驗は僕に近い人々の僕に近い境遇にゐない限り、僕の言葉は風の中の歌のやうに消えることを教へてゐる。從つて僕は君を咎めない。……

僕はこの二年ばかりの間は死ぬことばかり考へつづけた。僕のしみじみした心もちになつてマインレンデルを讀んだのもこの間である。マインレンデルは抽象的な言葉に巧みに死に向ふ道程を描いてゐるのに違ひない。が、僕はもつと具體的に同じことを描きたいと思つてゐる。家族たちに對する同情などはかう云ふ欲望の前には何でもない。これも亦君には inhuman の言葉を與へずには措かないであらう。けれども若し非人間的とすれば、僕は一面には非人間的である。

僕は何ごとも正直に書かなければならぬ義務を持つてゐる。（僕は僕の將來に

對するぼんやりした不安も解剖した。それは僕の「阿呆の一生」の中に大體は盡してゐるつもりである。唯僕に對する社會的條件、――僕の上に影を投げた封建時代のことだけは故意にその中にも書かなかつた。なぜ又故意に書かなかつたと言へば、我々人間は今日(こんにち)でも多少は封建時代の影の中にゐるからである。僕はそこにある舞臺の外に背景や照明や登場人物の――大抵は僕の所作を書かうとした。のみならず社會的條件などはその社會的條件の中にゐる僕自身に判然とわかるかどうかも疑はない訣には行かないであらう。）――僕の第一に考へたことはどうすれば苦まずに死ぬかと云ふことだつた。縊死は勿論この目的に最も合する手段である。が、僕は僕自身の縊死してゐる姿を想像し、贅澤にも美的嫌惡を感じた。（僕は或女人を愛した時も彼女の文字の下手だつた爲に急に愛を失つたのを覺えてゐる。）溺死も亦水泳の出來る僕には到底目的を達する筈はない。のみならず萬一成就するとしても縊死よりも苦痛は多いわけである。轢死も僕には何よりも

先に美的嫌惡を與へずにはゐなかつた。ピストルやナイフを用ふる死は僕の手の震へる爲に失敗する可能性を持つてゐる。ビルディングの上から飛び下りるのもやはり見苦しいのに相違ない。僕はこれ等の事情により、藥品を用ひて死ぬことにした。藥品を用ひて死ぬことは縊死することよりも苦しいであらう。しかし縊死することよりも美的嫌惡を與へない外に蘇生する危險のない利益を持つてゐる。唯この藥品を求めることは勿論僕には容易ではない。僕は內心自殺することに定め、あらゆる機會を利用してこの藥品を手に入れようとした。同時に又毒物學の知識を得ようとした。

それから僕の考へたのは僕の自殺する場所である。僕の家族たちは僕の死後には僕の遺產に手よらなければならぬ。僕の遺產は百坪の土地と僕の家と僕の著作權と僕の貯金二千圓のあるだけである。僕は僕の自殺した爲に僕の家の賣れないことを苦にした。從つて別莊の一つもあるブルジョアたちに羨ましさを感じた。

君はかう云ふ僕の言葉に或可笑しさを感じるであらう。僕も亦今は僕自身の言葉に或可笑しさを感じてゐる。が、このことを考へた時には事實上しみじみ不便を感じた。この不便は到底避けるわけに行かない。僕は唯家族たちの外に出來るだけ死體を見られないやうに自殺したいと思つてゐる。

しかし僕は手段を定めた後も半ばは生に執着してゐた。從つて死に飛び入る爲のスプリング・ボオドを必要とした。（僕は紅毛人たちの信ずるやうに自殺することを罪惡とは思つてゐない。佛陀は現に阿含經の中に彼の弟子の自殺を肯定してゐる。曲學阿世の徒はこの肯定にも「やむを得ない」場合の外はなどと言ふであらう。しかし第三者の目から見て「やむを得ない」場合と云ふのは見す見すより悲慘に死ななければならぬ非常の變の時にあるものではない。誰でも皆自殺するのは彼自身に「やむを得ない場合」だけに行ふのである。その前に敢然と自殺するものは寧ろ勇氣に富んでゐなければならぬ。）このスプリング・ボオドの役

に立つものは何と言つても女人である。クライストは彼の自殺する前に度たび彼の友だちに（男の）途づれになることを勸誘した。又ラシイヌもモリエエルやボアロオと一しよにセエヌ河に投身しようとしてゐる。しかし僕は不幸にもかう云ふ友だちを持つてゐない。唯僕の知つてゐる女人は僕と一しよに死なうとした。が、それは僕等の爲には出來ない相談になつてしまつた。そのうちに僕はスプリング・ボオドなしに死に得る自信を生じた。それは誰も一しよに死ぬもののないことに絶望した爲に起つた爲ではない。寧ろ次第に感傷的になつた僕はたとひ死別するにもしろ、僕の妻を劬りたいと思つたからである。同時に又僕一人自殺することは二人一しよに自殺するよりも容易であることを知つたからである。そこには又僕の自殺する時を自由に選ぶことの出來ると云ふ便宜もあつたのに違ひない。

最後に僕の工夫したのは家族たちに氣づかれないやうに巧みに自殺することで

ある。これは數箇月準備した後、兎に角或自信に到達した。（それ等の細部に亙ることは僕に好意を持つてゐる人々の爲に書くわけに行かない。尤もここに書いたにしろ、法律上の自殺幇助罪（このくらゐ滑稽な罪名はない。若しこの法律を適用すれば、どの位犯罪人の數を殖やすことであらう。藥局や銃砲店や剃刀屋はたとひ「知らない」と言つたにもせよ、我々人間の言葉や表情に我々の意志の現れる限り、多少の嫌疑を受けなければならぬ。のみならず社會や法律はそれ等自身自殺幇助罪を構成してゐる。最後にこの犯罪人たちは大抵は如何にもの優しい心臓を持つてゐることであらう。）を構成しないことは確かである。）僕は冷やかにこの準備を終り、今は唯死と遊んでゐる。この先の僕の心もちは大抵マインレンデルの言葉に近いであらう。

我々人間は人間獣である爲に動物的に死を怖れてゐる。所謂生活力と云ふものは實は動物力の異名に過ぎない。僕も亦人間獣の一匹である。しかし食色にも倦

いた所を見ると、次第に動物力を失つてゐるであらう。僕の今住んでゐるのは氷のやうに透み渡つた、病的な神經の世界である。僕はゆうべ或賣笑婦と一しよに彼女の賃金（！）の話をし、しみじみ「生きる爲に生きてゐる」我々人間の哀れさを感じた。若しみづから甘んじて永久の眠りにはひることが出來れば、我々自身の爲に幸福でないまでも平和であるには違ひない。しかし僕のいつ敢然と自殺出來るかは疑問である。唯自然はかう云ふ僕にはいつもよりも一層美しい。君は自然の美しいのを愛し、しかも自殺しようとする僕の矛盾を笑ふであらう。けれども自然の美しいのは、僕の末期の目に映るからである。僕は他人よりも見、愛し、且又理解した。それだけは苦しみを重ねた中にも多少僕には滿足である。どうかこの手紙は僕の死後にも何年かは公表せずに措いてくれ給へ。僕は或は病死のやうに自殺しないとも限らないのである。

附記。僕はエムペドクレスの傳を讀み、みづから神としたい欲望の如何に古い

ものかを感じた。僕の手記は意識してゐる限り、みづから神としないものである。いや、みづから大凡下の一人としてゐるものである。君はあの菩提樹の下に「エトナのエムペドクレス」を論じ合つた二十年前を覺えてゐるであらう。僕はあの時代にはみづから神にしたい一人だつた。

（昭和二年七月）

〔遺稿〕

芳川は一ト晩で三枚ばかりしか書けなかった。石山推敲を推敲を重ねた。夜を徹して書かうとした。彼は小説家を言ふ一方色黒の御面相で、眼は涼しく物凄い。

漢文の素養も豊かなものがあった。鴎外は彼を

[illegible] 修飾のない文章を言ふ。小説家は芳川の好奇心を覚えた。自分を在りのまゝに人の吸収しようとした。作者は見るから[illegible]。芳川は文章を自信があった。晩年の作品を文章をすかっている。彼は一途な文章を言ふ。[illegible]。文章が消えた[illegible]。文章が自ずから。しまいには文章が[illegible]。文章が[illegible]。芳川は行かない。志賀を鴎外も文章が人が書いた。芳川は[illegible]。彼は[illegible]風を恐れなかった。陶一郎を解散した。彼は平坦[illegible]文章が